終わりの探究士-seeker of the end-

火浦　劉聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの探究士－ｓｅｅｋｅｒ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｅｎｄ－

【Ｎコード】

Ｎ１２８４Ｗ

【作者名】

火浦　劉聖

【あらすじ】

物事の終わりが見える『終わりの探究士』と呼ばれる男が世界の終わりに立ち会う。混沌に満ちた世界に終わりを告げるのは探究士本人か、それとも……。

モノローグ

物事には全て終わりがある。
終焉、終末、ジ・エンド、幕引き、
名前は好きに付けてくれ。

遠い過去に全てが始まったとしたら、
もうじき全ての終わりが来る。

そして俺は全てを終わらせるために
この現実世界に派遣されてきた。

俺の本名は明かせないが、
仕事では「トム」と名乗っている。

移行前世界と呼ばれる
この不完全で混沌とした世界の終わりを
見届ける、もしくはこの手で
終わりを告げるまで、任務は終わらない。

俺には特殊能力というか、
人と違った特質がある。

物事の終わりが『見える』んだ。

雑踏を歩くとよく分かる。

繁盛しているショッピングモール、

幸せそうなカップル、
筋肉隆々でジョギングしているジイさん、
なんの問題もなさそうに我が物顔で歩く大学生。

みんな、いつそれが『終わる』かなんて知りゃしない。
俺の目には数字が浮かんでカウントダウンを告げている。
それこそ本人には言えないような
残酷な数値が頭の上で回ってんだ、ひどいもんだろ。

俺は一番上の空を越えた真上を仰ぐ。
そう、カウントされた数字を見て
どうやらもう残りわずかな世界の寿命を
見て、少し笑うんだ。

俺の興味は終わりそのものではない。
終わるまでの過程にある。

この世界は元いた世界からずっと眺めていた。
こんな混沌とした世界に終止符を告げるのは誰なんだろうな。

モノローグ（後書き）

初投稿です。未熟者ですが、様々なご意見お待ちしております。

目覚め

車のクラクションで目が覚めた。
グレーがかった空にモノクロに見える風景、
海を横断する大きな橋の上を走行する車の中だった。

渋滞は一直線の生命体のように続く。
時々脈動するように車たちが這い進む。

退屈な光景だったが俺の関心事は
まだ色が感じられないことだった。
終わりを見る能力者には色彩能力などいらないってか。
まだこの世界に適応しきれていないだけとタカをくくり、
運転席に目をやった。

一目で分かった。
俺たちの同業者だってことが。
頭上のナンバー、減っていく数字が存在しない。
俺たちに終わりという概念はないのだ。

皮肉なものだ。
何千、何億という終わりを見届けているのに
当の自分自身の終わりには永久に立ち会えない。
終わりがないとはいえ、刃物で心臓を貫かれたり、
銃弾で頭を打ち抜かれたらどうなるか、
一度新米の頃、同業者に聞いてみたことがあった。

顔も覚えていない奴はこう言った。
「移行先での体はそこでおしまいだ。

一度自分たちの世界に戻って
体を用意して何度でも任務達成まで
挑戦させられる。気が遠くなる話さ」

俺たちは平行次元上で別段成功した世界に所属している。
名前なんてものはついてない。
世界に名前を付けるなんて、ナンセンスだろ。

その俺たちの世界から
今いる現実世界に移動する事を
俺たちの間では『移行』と呼んでいる。

「目が覚めたか」

運転席の、大柄でスキンヘッドの額に傷のある男は
俺に気付いたらしく、横目でそう言った。

「前後の記憶が少し飛んでいるんだが、
俺の目先の任務はなんだ」

俺はすこしだけ気だるい体をシートに預け
なるべく遠くの景色を眺めて言った。

「お前の任務は分かっているはずだ。
この世界の終わりを見届けること。
だが、まぁその前に
ウォーミングアップというか、
肩ならしに少し暴れてもらう」

そう言って運転席下のポケットから

４５口径の自動拳銃を俺の膝の上に置いた。
「こんなものどこで入手した？
みだりに使える世界だとは
聞いてないぞ」

俺の理性は思わず
拒否反応を起こした。

「まぁ、そう騒ぐな。
廃工場でのほんの射撃練習だ。
確かにこの国では
認められてはいないみたいだが、
やばくなったら俺に任せろ」

そう言って前を見るように
運転手がジェスチャーした。

渋滞そのものを示すカウントダウンが
ストップウォッチの秒数以下のように
勢いよく流れ出した。

途端に車たちがスムーズに進みだす。
運転手は得意げに笑ってみせた。

「その力で世界の終わりを
加速させることは出来ないのか？」

図らずとも聞いた。
率直の所、

手っ取り早く終わらせられるに
越した事はない。

「対象が抽象的や大きすぎるものは
さすがに無理だ。その気になれば
人の寿命くらいは簡単だぜ
神経を使うが、少しくらいなら
止めることだってできる」

俺はシートに頭を預けたまま頷いた。

パートナーとしては、不足なし、か。

ブラックボックス

ふと俺は
渋滞が解消されるメカニズムについて
考えをめぐらせた。

はて、数字を操作するだけで
現実の何列にも連なった車を
一気に動かす事が可能だろうか。

理論上、
先頭車両を高速で動かせば
列の滞りは解消される。

だが、物事にはバランスというものがある。
ある日突然渋滞中の先頭車両が
ありえないスピードで動き出したら、
交通管制所はどう反応するだろうか。

「ばれやしねぇよ。奴らは
ブラックボックスを
封印したがる因習がある」

まるで俺の心を見透かすように
隣の男がアクセルを強め、
前方を見ながら言った。

「ブラックボックス？」

俺がそう訊くと、
運転手は肩をすくめて
ハンドルを切った。

「ありえない出来事に遭遇した時、
それもあまりに驚異的な場合で
かつ誰にも信じてもらえないような
そんなことがあったら、この世界の奴らは
内部で隠蔽するか、黙ってんだよ。
ありえない出来事、
たいてい俺たちが原因だが、
それを俺たちの間では
ブラックボックスと呼ぶ」

俺は再び前に向き直り、
背もたれに大きく寄っかかった。

それじゃあなんでもありじゃねぇか。

心の中で毒づく。
なにをやっても許されるなんて
俺の美学に反する。

この世界のことをよく知っている俺は
気分を害した。

この世界はいろんな制約、
例えば法があり、
限定された可能性の中で

人々がもがき苦しみながら
自己実現を達成して
よくも悪くも
最後には何かを残して散っていき、
次の世代が残したものを受け取り
再び後世に伝えていく、
制限がありながらも美しい世界だった。

「俺たちこそがブラックボックスだな」
皮肉をふんだんに使って呟いてみたが、
運転手は聞こえているのか、いないのか
反応はなかった。

「着いたぞ」
男はそう言って車を止めた。

いつの間にか俺には色彩が
戻っていた。
時刻はもうすでに夕方を越え、
夜に差し掛かっていた。

自動拳銃をこっそり内ポケットに入れて
ドアを開けた。
気付かなかったが、
俺たちは黒の喪服のようなスーツを着ていた。
ネクタイは濃紺のストライプでなんだか俺は
２０代の若者のような見た目だと思った。

運転手だった男の方は
大きめのダブルのスーツに

エンジ色のネクタイ。
どうやら俺たちはビジネスマンを
装っているみたいだが、
明らかに無理があった。

低級のチンピラが関の山だ。
俺たちの乗っていた
黒塗りの四角い乗用車に映る自分の姿をよく見た。

髪はぼさぼさだった。
長めで目にかかる。
正直うっとうしい。

顔立ちは細めの瞳から、
詐欺師のような風貌に思えた。
狐のような雰囲気のせいか。

だが、顔のパーツはそれぞれ
はっきりしていた。

あれこれ眺めているうちに
大柄のスキンヘッドが目の前の
廃倉庫の錠を開けていた。

仕方なく俺は前に進む。

不穏にゼロへと向かっていく
倉庫のカウントダウンの意味を
今はまだ知らぬまま。

射撃練習

倉庫はひとつだけ港に存在していた。
ずいぶん前に使われなくなったみたいで
トタンの屋根が風化しかかっていた。

壁面も落書きやところどころ穴があり、
いい雰囲気は控えめにも感じられない。

俺は射撃練習という名目で
目の前の熊のようなつるんとした頭の男に
何をされるのだろうか。

「おい。中、入るぞ」

俺が窺うように黙っていると
男が振り返って奥に消えていった。

そういえば名前を聞いていなかったが、
この仕事になれ合いは不要だ。

あの男の、たまに人の心に入ってくるような
間のいい話し出し方は、
もしかして人の心が読めるのではないかという
錯覚さえ覚える。

止まっていた足を前に出して
倉庫の中に踏み入れた。

真っ先に飛び込んでくるのは
鉄の匂いだ。
血のような錆びた鉄が
むせ返るように鼻孔に入り込む。

そして熱気だ。
むっとする熱が扉を開けたことで
一気に動き出した感じだ。

内部は思ったより明るかった。
二階に並んだ窓が大きく、
外の明るさがそのまま差し込んでいた。

「この世界で必要なのは身を守る術だ。
ほら、あの缶。撃ってみろ」

そういって男は３０ｍくらい離れている
緑色の空き缶を指した。

俺は必要ないのに人目をはばかり、
懐から自動拳銃を取り出した。

確認したが、弾倉はすでに込められていた。
スライドを引いてカチャリという音が
小気味よく響く。

引き金を引く右の指に幾分か緊張が走る。
ただの射撃練習だ。
自分自身に言い聞かせる。

だが、なんのため？
俺はその理由をあえて考えなかった。
考えた所で出る答えはないだろう。
移行先の世界では任務をこなす。
そのための必要なステップなのだと、
俺は確信していた。

銃声が一発。

乾いた音が倉庫内に響き、また静まり返る。
発射された銃弾は缶の横にそれた。

「見てな」
男が前に競るように出て、
俺から奪うように銃を取り
両手で構えものの数秒で発砲した。

弾ける音が聞こえ、
缶に命中したのが確認できる。

「いいか、まだお前はその体に慣れてない。
神経を研ぎすまして精神と肉体を同期しろ
次第に馴染んでいくのが分かるぜ」

そう言って俺に銃を持ち手を前にして
手渡してきた時、
確かに俺は背後に気配を感じた。

「なぁ」

男はすでに気付いているみたいで短くこう言った。
「上出来だ。よく分かったな」
額に傷を持つ大柄の男は、
懐から自分の得物を取り出して、
物陰に隠れるように黙って指示した。
柱に身をひそめた俺は、
隠れようもなく、
気配のする方に堂々と対峙する
男を心の中で敬服した。
次の瞬間、
消音銃がその牙を男の右肩に食らいつく。
勢いで得物を落とした男は肩を庇い、
右膝を地面に付く。
思わず俺は男の安否を案じ叫ばずにはいられなかった。
「おい、大丈夫か！」
「来るんじゃねぇ！」
必死の形相で制した。
その気迫は凄まじく、鬼気迫る勢いだった。
「どうやら『ブラックボックス』は

俺たちだけじゃないみたいだぜ……」
それが男の最期の一言だった。
俺は思わず目を伏せた。

入り口から4、5人の人物が
小走りで突入してきた。
一瞥(いちべつ)する限りでは
皆得物を持ち、武装していた。

勝ち目はない。

俺はここで終わるのか。
いや、ただやり直しをくらうだけか。
それにしてもここで終わりたくない。
それだけは確かだ。

これを、この世界にいる人間の感情では
執念と言うのか、
生への執着と言うのか。
どちらにしても胸が熱くなった。

人間らしくなってきたかな。
そう思って意を決し、
銃を構えたまま柱から入り口側に
飛び込んだ。

銃撃戦

一人倒した。
手応えで分かる。
飛び出した出会い頭に
狙い撃ちしたのが功を奏した。

無我夢中で隣の柱に移る。
集中豪雨の弾幕が俺の影を縫う。

3対1か。
厳しい状況であることに違いない。

弾倉にはまだ銃弾が残っている。
グリップを握る手が汗ばむ。

「君は『あちら側の人間』か？」

突如、拡声器で低い男の声が
耳をつんざいた。

敵は何を知っている？
どこまで知っているのだろうか。

俺は沈黙を守った。
もちろん問いかけに答えようものなら
自分の位置をさらすことになる。

相手はあえて位置をさらしたが、
優勢な立場にあるものゆえに出来ることだ。

「その沈黙は肯定として
受け取らせて頂くぞ」

ピン、という音が聞こえたかと思うと、
側のコンテナごと爆風に吹き飛ばされた。

俺のいた柱からは離れていたので
被害は受けなかった。

手榴弾か……。
相手は軍か。
そう考えている間にも
敵との距離は狭まっていく。

相手の事を考えると
手榴弾はもう一発投げてくるだろう。
これは憶測だが、
一人ひとつ手榴弾を所持しているとして、
拡声器を使った男性はまだ使用していないと見た。
側近のうち一人が手榴弾を使い終え、
もう一人がこれから再び威嚇に使うであろう。

それならばと、俺は相手との間合いを考慮して、
近づいてくる敵の気配を確認して、
薄暗闇の中、投げる直前の手榴弾を狙い撃ちした。

炸裂する噴煙と炎を前転してかいくぐり、

姿をくらませる。
あとの二人も巻き込めたかと思ったが、
気配を感じる。

あと二人か。
勝機が見えてきた。

洒落た置き土産

「抵抗を続けるなら我々にも
考えがある。
降伏する気はないか」

威勢のいい声だった。
どこから聞こえてくるのか、
左右を見回した。

俺はある恐ろしい考えが
頭をよぎった。

敵の数は本当に４人だったのかと。

ふと見上げた二階の窓際に
目が合ってしまった。
拡声器を持った、小柄でメガネをかけた男性と。

「君に勝機はないよ」

今度は拡声器を通していなかったが、
十分聞こえる声量だった。

包囲されている。
気付いた時には遅かった。

暗闇からガスマスクと防弾チョッキ、

そしてアサルトライフルで武装した、
１０名を超える人影が、
最初からいたように次々現れた。

相当数現れたところで、
二階のリーダー格の男性が
拡声器で問いかけた。

「さて、君は一体？」

「トムでいいよ」

そう言って一気に腰を落とした。
命を顧みず、あらん限りの強がりと
抵抗を試みる。

人影が一斉に射撃すると思ったが、
撃ってこない。

俺はその隙を奪って、
一番外側にいる人影の腰元を撃った。

至近距離なら手榴弾に当てることは
先ほどより容易だった。
ドミノのように爆発が連鎖した。

人が弾けて直視できない光景が
脳裏に浮かんだ。

俺はなんとか横に飛び込んで

致命傷を回避した。
火傷と擦り傷で済んだようだ。

ふと絶命している同業者の男を見ると、
指先を上に向けて何かを合図していた。

倒れていた敵の銃器の少し上を見ると
発砲までのカウントが『1』で止まっていた。

最期の置き土産か、
なかなか洒落たことをしてくれるものだ。

一瞬で我に返って二階の男を見る。
いない。

「逃がすかよ！」
俺は急いで入り口に駆け出した。

ブラインダー

遠くにパトカーのサイレンが鳴り響く。
残された時間はそう長くない。
一気にかたを付ける。

倉庫の外に出た俺は重火器が積載された
大型のバンが3台止まっているのを確認して
急いで身をひそめた。

他に待機している仲間に俺の存在を
知られたらまずい。
始末されたことにしていれば都合がいいが、
リーダー格が逃げてくれれば
どういう戦況なのか一目瞭然だろう。

コツ、遠くでピンヒールの足音が聞こえた。
俺は空耳か気のせいに思い、
上の空でその音を聞き流した。

見つけた。
あの小柄なメガネは急いで車に辿りついて
中にもぐりこむ。
ヤバい状況だ。敵に逃げられる。

コツ、先ほどより大きく確かな音が聞こえる。
俺は完全に頭に血が上っていた。
心臓の脈動もはち切れそうなくらい感じていた。
何が起こっている？

威嚇射撃を打ち込もうとしたが、
少しだけ我に返って止めた。
今の状況下では火に油を注ぐようなものだ。

コツ、ここで初めて俺は音の主を探した。
というのも、
すぐ近くにまで来たような音だったからだ。

女性だった。
髪をブロンドにしているが、
俺と同じ国の人間だということは
雰囲気で分かった。
そして何より俺を落ち着かせたのは
彼女も同業者だということだった。

妖艶そうでして、クールさを醸し出す、
権力者の令嬢というイメージが合う女性だった。
大きなリングのピアスに、
グレーのスーツにパンツスタイル。
その腰にかけられている日本刀らしきもの以外、
中央都市の中枢企業で働いている女性そのものだった。

「車を手配してあるわ」

そう言って倉庫と海に挟まれた細い路地を指した。
俺たちは無言で移動した。
心の中で倉庫のカウントがゼロになる頃だと、
思いだした。

思わず俺は振り返った。
女性は車に着いて運転席に乗り込んで、
こちらを窺っている。

倉庫が一瞬膨張したように膨らんだかと思うと、
轟音を立てて、爆発した。
例の一団が証拠隠滅のために、
爆薬をしかけたのだろう。

俺は名前も知らない同業者のことを少し悼み
前に向き直り、車に乗り込んだ。
赤い外国製のスポーツカーだった。

「ファスターはまた戻ってくるわ」
すぐにアクセルを踏んで、女性が言った。

一拍置いて、
それが同業者のコードネームだと知る。

俺たちは役割に応じてコードネームを振り当てられる。
奴は時間を早められたから『Ｆａｓｔｅｒ』なのだろう。

「紹介が遅れたけど、私はイヴと呼んで
ちなみにブラインダーよ」

『Ｂｌｉｎｄｅｒ』とは少し聞いたことがある。
同業者の間では効果を発揮しないが、
移行先の世界では、任意のものを
見えなくさせることができる技能者のことを言う。

「あんたのその刀も」
ふと後部座席に寝かされている日本刀を指した。

イヴは頷いた。
「その通りよ。この『黒き慟哭』は
この世界の人間には見えない」

「ところでどこに向かっている？」
俺はふと話題を切り替えた。
バックミラー越しに炎上した倉庫を見やる。
消防車やパトカーやらが殺到している光景が
映っていて、俺は肝を冷やした。

「本部よ」
イヴはそう言うとハイウェイに入り、
アクセルを強めた。

本部。
俺はおぼろげな記憶が
少しずつ繋がっていくのを感じた。
あの頑固親父がいる所か……。

本部というのは俺たちの本拠地だ。
恐らくこの世界の人間で言う
ホームに近いのだろう。

そこにはちゃんと一人ひとりの個室が
用意されている。

「ところであなた、名前は」

イヴがバックミラーをチラッと見た後訊いた。
「俺の事はトムでいいよ」
いつからだろうか、
俺のいた世界にも娯楽はあった。
小さい頃に見た映画で、
ヒーローが敵の懐に忍び込んで、
驚いた敵にヒーローが一言、
「トムでいいよ」
という決め台詞とともに始末する。
その姿に憧れて、俺も使うようになった。
それ以来、本来の名前は使っていない。
「変な名前ね。似合ってないわよ」
イヴは冷笑を浮かべてハンドルを切る。
俺は再び不穏な影を察知した。
読みが正しければ、
先刻からピッタリと後ろからつけられている。
俺はイヴに何も言わずに自動拳銃を構えた。
「急カーブにさしかかるわ。気をつけてね」
イヴの『気をつけてね』は、
もはや追っ手のことを意味していた。
先ほどの黒いバンだった。
一台の後ろにもう一台。

計2台で追ってきている。
あと1台はどこに……。

俺は追っ手のバンのカウントを盗み見た。
今の俺には理解しがたい数値を示していた。

カーチェイス

3車線の高速道路は比較的空いていた。
後続している2台のバンの運転手も
俺が攻撃態勢にいることに気付いたみたいだ。

一列に並んでいたバンが動き出した。
俺たちが乗っている車の後部と右側に移動した。
挟まれたか……。
この後の展開の予想が容易にできた俺は
迎撃態勢に入る。

イヴが取った行動は意外だった。
急ブレーキをして後部のバンと激突する。
エアバッグが出たが、
イヴは気に留めずハンドルを回す。
右に付いていたバンは遥か前方に流れた。

俺は後ろで往生している
バンのタイヤを撃っておいた。
命中した。射撃精度が上がってきている。

「ナイスよ」
イヴがしぼんだエアバッグをかき分けて言った。

前方でスピードを緩めたバンを
勢いよく追い抜いた。

俺は窓からバンの窓とタイヤに
それぞれ2発ずつ打ち込んだ。

「相手は一体」

追いかけてこないことを確認して
イヴに訊いた。

「対私たち用の専門機関、
『オケアノス』よ。奴らは
世界の終わりを望まない。
なんとか終わりを食い止めようと
私たちを邪魔してくるわ」

厄介な奴らが現れたものだ。
できれば穏便にいきたいものだった。

俺は窓から顔を出して
空を仰いだ。
この世界のカウントは止められはしない。

いや、俺が終わらせる。
それくらいの意思でここにきた。

奴らが終わりを食い止めるというなら、
それすら俺が終わらせるまでだ。

司令官

時刻は深夜を回っていた。
若干傷んだスポーツカーが
山林のゲートをくぐる。

俺たちは軽い疲労を
自らの中に認めていた。

イヴも黙ってハンドルを操作する。
うっそうと生い茂った樹木を
かき分けるように車が進む。

山奥の研究施設、
それが俺たちの本拠地の
仮の姿だ。

驚くべきことは国の施設という
看板があることだ。

しばらく坂道を上がって
敷地内の地下駐車場に入る。
山の中から一気に近未来といった感じだ。
近代的な青い電球がうっすら輝く。

駐車場内は比較的空いていた。
中には4、5台くらいの様々な車が
点在して駐車されていた。

「着いたわ。言っておくけど、
権蔵(ごんぞう)司令官には
気をつけた方がいいわ」

キーを引き抜いてイヴが
さらりと言った。
口元には微笑が浮かんでいた。

「知っているさ、くたばり損ないの
老いぼれジジイだろ」

「……着いたようだな」

顔を上げて俺は凍りついた。
その老いぼれジジイが
目の前で俺たちを待ち受けていた。
一体いつの間に……。

神河(かみかわ)権蔵は
８０歳を超えてはいるが、
一見６０代にも５０代にも見える、
年齢不詳の男だ。
白い髪を短く切り込み、
シワの少ない顔からは
厳格な表情が窺える。
唯一、年齢を確認される特徴と言えば、
彼の乗っている電動車椅子だった。

「ワシらは姿を変えて生きつづける存在。

老いぼれた姿も仮の姿だ。
何を惑わされている、庵仁(あんじん)」

俺は嫌悪感を込めて返答した。

「その名前は捨てたって言ってんだろ」

俺は車から出て勢いよくドアを閉めた。
イヴはその様子を咎めずに
ゆっくりとした仕草で車から出た。

「お久しぶりです、司令官」

礼儀正しく挨拶する様は
会社員のようだと俺は思った。

「うむ。これで揃ったな。
階上で皆が待っている」

そう言って権蔵司令官は
エレベーターに向かって
音も無く車椅子を動かした。

ここではカウントの存在しない、
憩いの場だ。
待ち受ける激動の日々を前に
幾分か羽根休めが出来そうだ。

メンバー

階上にエレベーターで上がると2名の男女が待機していた。
二人と目が合って俺は特徴を見た。

男の方は俺より髪が長く、野暮ったい風貌ながら冷静で実力を持っていそうだった。
計り知れない空気をまとっており、ただ者ではないと一発で分かる。

女性の方は２０代だろうか、若く見えて、大きな丸い瞳と黒髪が印象的だった。
瑞々しい柑橘系の果実のような爽やかさと元気一杯の笑顔がひときわ目立っていた。

二人とも青みがかった紺の金色で縁取られた軍服っぽい制服を身につけていた。
女性の方はアレンジされていて、襟と裾にゴシック調のフリルとレースがあしらわれていた。

「紹介しよう、庵仁とイヴだ」
権蔵が悠然として車椅子で進み、振り返るように回転して紹介した。
俺とイブは軽く礼をした。

男の方は俺より背が高い。重圧的な態度で睨んできた。
「だいぶおっせーじゃねか。待ちくたびれたぜ」

「まーまー、そんなに気にしなくていいじゃない」
女性の方はその場で跳ねたりして浮ついた雰囲気だった。
「こちらは怜治(れいじ)とカートネット嬢だ。お前らのこれからの仕事仲間だ」
俺は怜治とカートネットをじっくり観察した。
それはもちろん、これから共に背中を預けられるかという信用にも関わることだった。
怜治の方はある程度の技量と信頼を持ち合わせていそうだ。
現に時間に厳しいという面では頼もしい。
問題はカートネットだ。奴はまだ幼い雰囲気が残っている。
カートネットの得物は恐らく腰に下げた二丁拳銃だろうが、彼女がつけているとおもちゃに見える。
「まあ、よろしくな。お二人さん」
そう言って怜治が握手を求めてきた。イヴと俺はそれぞれ応じた。
カートネットはと言うと、テーブルの向こうで鼻歌混じりに銃器の手入れを始めた。
「あいつは腕は確かだ。許してやってくれ」
怜治が助け舟を出した。
いまいち未知数だが、これでメンバーが揃ったと言うことになる。
そして俺が権蔵司令官を見やると彼も満足気に話し始める。
「揃ったところで今回の仕事の詳細だ」
皆神妙に黙る。カートネットは手入れを終えて、イソイソと舞い

戻ってきた。

「この世界を終わられる因子が3つある。ひとつは細菌、次に核兵器、そして最後が人間だ。
お前らにはこの3つの調査を願おう。
これは手分けではなく、ひとつずつ全員で調査に向かってもらう。以上だ」

カートネットが手を挙げた。

「しれーかん、人間の世界なのに人間が終わらせるんですかぁ？」

その質問に怜治が横から答えた。

「レトリックだカートネット。ダイアモンドを砕けるのはダイアモンドだけなのと同じだ」

その答えに満足したのか、カートネットは頷いた。
とっさの機転に俺は思わず舌を巻く。
確かに例え話として説得力がある。

「他に質問は大丈夫か。それでは早速今から言う地域に出向いてもらう」

権蔵は部屋のプロジェクターを起動させて、地図と座標を表示させた。
部屋の奥は壁面が窓になっているが、白いスクリーンが降りてきて部屋が暗くなった。

「極北の研究施設、そこでバイオ実験と共に人類滅亡のウイルスが

培養されている」

俺は画面を見ながら再びこう問わずにはいられなかった。
なんのために？
しかし、その問いが無駄と分かっているため、口を閉ざした。

人間が人間を滅ぼす細菌を生み出す。
自分たちもいなくなる前提で作っているのだろうか、それとも……。
自分たちだけの世界を創造するつもりか。

俺はそんな不条理には制裁を加えなければならないと思った。
そんなエゴで終わらせはしない。
俺は本当の意味での『終わり』が見たい。
飽和しきった、世界の完全な終わりを。

なぜなら俺こそが終わりの探求士だからだ。

過去の悪夢

その後、簡単な説明を受けて宿舎に通された俺はすぐに爆睡した。
部屋の内装や家具の位置など確認せずに導かれるように寝台に埋もれる。

ものの１０分で眠りについた。意識はもう遠のいている。
そこで夢を見ていたんだ。

何年も前のこと。
俺がまだ庵仁としてｓｅｅｋｅｒをやっていた頃のことだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「第八部隊、どうした！応答しろ！」

炎上した市街地でヘルメットを被った男が通信機に向かって叫ぶ。
これは確か、浄前（じょうぜん）長官だ。
俺の直属の上司で有能だった人だ。

俺は空の上からの当時の様子を眺めていた。

戦況は劣勢。惨劇そのものだった。
相手は「レクリオス」という反乱組織だった。

レクリオスは脅威的な兵器を持っていた。
俺たちの輪廻を断ち切る、無間の闇に陥れる技術、
それが電磁魂魄剥離装置だった。

一見それは小型の機関銃に近い。
しかし撃たれたら最後。
目に見えない電磁波の力を借りて世界に移行する俺たちは
ゲートとも言える通路を失い、
永久に現実でも俺たちの世界でもない、闇へと彷徨うことになる。

俺たちはほぼ丸腰で奴らの奇襲に対応した。
奇襲をかけられた原因は俺にあった。

「第八部隊、壊滅しました」
大急ぎで駆けてきたのは丸メガネの同僚、框（かまち）だった。

当時の兵卒の服を着た俺が絶望に満ちた表情で黙っている。
そう、この時すでに悟っていた。

すべて俺のせいだって……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

大量の寝汗とべっとりした絶望とともに目覚めた。
夢か。
悪夢以外の何ものでもないなと、軋む体を起こす。
４時。まだ出発には早い時間だ。

のっそりと冬眠から覚めた熊のように寝台を抜け出し、寝覚めの水を少し含んだ。
外は涼しいかな。ふと思い立った俺はあてがわれた宿舎を抜けて、少し外の風を浴びることにした。

宿舎はアパートのような小さな建物が集合していた。
宿舎の入り口を出た。
驚いたことにそこにはカートネットが下着姿で背を向けるように突っ立っていた。

カートネット

「君は庵仁だっけ？」
俺に気付いたカートネットが記憶を探るように考えを巡らせて言った。
どうやら短期記憶に弱いらしい。
「トムでいいよ」
俺は思わず反射的にそう言った。
目の置き場に困るほど、カートネットは流線型の曲線美を備えていた。
小さい体ながらも豊満な肉体に、思わず言葉を失う。
そんな俺の小さな苦悩などよそにカートネットが訊いてきた。
「もしかして『ヘイトレッド・ゴースト』のトムの真似してるの？」
図星だった。よくその映画名まで知っているものだ。
古い俺たちの世界で人気だった映画だ。
若いカートネットが知っているのは意外だった。
俺が頷くとカートネットはその長い黒髪を流れるように振って喜んだ。
「私もあの作品好きだよー。かっこいいよね、トム」
俺はその話題で盛り上がりたかったが、確認しておきたいことがあった。
「なぜこんな時間にこんな格好で？」

カートネットは一瞬体をピクと止めて、照れるように笑って答えた。

「眠れなくって。私はいつもこの格好で寝ているの。忘れられなくてね、お兄ちゃんのことが」

その表情にはわずかな陰りが見えた。

「兄を亡くしたのか……」

俺は再び声を無くした。

ショックだったのかもしれない。

カートネットが常識を逸脱しているのも、兄を亡くしたことが背景になっているのかもしれない。

この仕事に就いている以上、様々な葛藤を抱えているのだなと、改めて思い知った。

「私、戻るね。その、いつか話せるといいな」

そういって蝶の様にひらひらと手をはためかせて、バイバイと言って消えていった。

不思議な奴だ。

そう思いつつも、先ほどのような不信感は消えていた。

俺の目はとうに覚めていた。

仕方なく自分の宿舎に戻り、今日の準備をするのだった。

不安

夜は明けた。細やかなもやがかかって、薄霧の山の中を下ることになる。
制服に着替えた俺は昨日集まった一階のロビーで遠景の木々を眺め待っていた。

これから本格的な任務が始まる。
生死を問う過酷な戦役になりそうな気配がした。
なぜだか分からないが、どれだけの仲間が生き残れるか。
そればかり心配だった。

今朝のこともあり、カートネットには無事でいてほしいと思った。
怜治は心配なさそうだ。彼は幾多の任務をこなしている印象が見受けられた。
イヴはどことなく謎めいた雰囲気だが、やる時はやる女性だろう。

そうこう考えているうち、最初に現れたのは権蔵司令官だった。
エレベーターが開くと同時に音もなく滑るように部屋に入ってきた。

「庵仁、不安か？」

俺の傍らまで来て一言、司令官が俺を見上げて呟いた。
鼻を鳴らして顔を背ける。

「俺はもうその名前を捨てたって言っているでしょう。

不安も何も、使命感に燃えてますよ」

権蔵は喉の奥でクックックと笑い、まっすぐに俺を見た。

「お前の罪悪感は手に取る様に分かる。
過去の過ちを繰り返さないように必死なようだな」

「あんたに何がわかるんだ！」
思わず大声を出した。クソっ、気分が悪い。
俺は足音を響かせて、司令官から離れた。
抱えている罪の意識、そんなの分かってなんになる。

いくら同情したって、仲間たちは帰ってこない。

俺が終わらせてしまったんだ。

出発

フロアにメンバーが集まってきた。
まず怜治が意気揚々と勇み足で現れた。そのにじみ出る自信はどこから出てくるのだろうか。
次にイヴとカートネットが二人並んでエレベーターから現れた。
宿舎が近かったのか、二人は意気投合していた。
なにやら笑い声を上げて楽しそうにフロアに入ってくる。

怜治は濃紺の制服の上に防寒用の茶色の毛皮のフードを羽織っていた。
イヴとカートネットも女性用にあしらわれた毛皮の防寒着を上から身にまとっていた。
俺だけ長袖の制服のみで、見るからにこれから極寒の地に向かう服装ではない。

「宿舎の支給棚にあったの見なかったのか？」
俺の不注意を怜治がなじる。
単純に俺は詫びて階下に降りていった。

宿舎まで戻って俺は時々こう考える。
この限りある一回の体験、この現実世界での生命を俺は幾度も繰り返しているのではないかと。
こうして宿舎玄関に備えられている厚手のフード付きのコートを取りに行くのも、
何回も繰り返しているのではないかという錯覚を覚える。
なぜだろうな、やはりそれはここが自分の元いた世界ではないから、

夢の中みたく現実味がないんだろう。

こう、なにげなく玄関に咲いた花だとか、
壁の材質、扉の触感、大地の匂いだとか、
俺は前にも体験したような気がするんだ。

と、いつも俺を悩ます既視感を振り払い、俺は階上へ外の階段で上がる。

取ってきたことを皆に伝えようとしたが、
どうやらみんな俺を待って、雑談もせず待機してくれていたみたいだ。

「その、すまない。待たせた」

もうチーム結成してから早くもリーダー格を醸した怜治がなんでもない様に言う。

「よし、出発だな」

それぞれが得物を確認してホルスターや腰に手を当ててエントランスに向かう。

二階の俺たちがいたラウンジはそのままエントランスに繋がっていて、
エントランスからは送迎の車両が付く。
その車に乗って東のターミナルへ向かう。

車は二台停まっていた。

「男女ペアで乗るぞ」
そう言って怜治は図らずとも目の前に停車された車にイヴと乗り込んだ。
そして図らずとも俺はカートネットとペアになって車に乗り込む。

急襲

「トムに兄弟はいるの？」

車中、山を抜けたところで後部座席に座ったカートネットが隣に座っている俺に話しかけてきた。

国籍不明のアンバーの瞳が吸い込まれそうだった。

運転手は無口な老夫で同業者なのは分かった。

しばらく質問について考えを巡らせてから俺は答えた。

「よく覚えていないんだが、姉がいた気がする」

一瞬時が止まったようにまじまじとカートネットが俺の顔を真顔で覗き込む。

「どういうこと？」

俺は外の景色を見て答えた。荒野に木々が続く代わり映えのない風景だった。

「俺がこの職業に就く時、職務に差し支えのあるものは全て奪われた。

小さい頃の記憶から生殖機能までだ。ユニオンもひどいもんだろ」

ユニオンとは元いた世界を統括する機密機関のことだ。

この機密機関に所属した俺は文字通り全てを奪われて、人外の力を手に入れた。

その代償が大きかったかどうかを確かめる術さえ奪われた今、そ

れが正しかったかどうかは分からない。
感覚機能までも、普通の人間より鈍くなった今、フルに稼働しているのは思考能力くらいか。

「ユニオンに間違いはないって言われる。
そのトムが奪われたものって、理由は分かんないけど、
確かに仕事に影響するんだと思う」

舌ったらずに弁明するカートネットに少なからず驚いた。
言い方は悪いが、少々知恵遅れに見えたからだ。
その雰囲気から、ユニオンを擁護している風に受け取れるが、無理もない。
俺たちはユニオンの駒。
統括の命令が絶対なのだから。

幹線道路に繋がるバイパスに入る折、俺はバックミラーから見た景色を疑った。
というより、即座に理性が否定したがっていたのが分かる。

先日のオケアノスのバンが見えたのだ。
それも、俺の妄想でなければ、こちらに向かってくる。
バックミラー越しに運転手も気付いたみたいだ。
無線で前方を走る怜治たちの乗っている車両に通達を入れる。
一言、簡略かつ本質的に。

「……奴らだ」

前の車両の後部座席に座った二人が同時にこちらを振り向いた。

正確にはその奥を見ていたのだが。

バンは一台、物々しいことに、軍の設備を横領したのか、ロケットランチャーを搭載していた。

「あれが発射されたら、マズいね」

のんきにカートネットが呟く。

まるで危機感が見受けられない。

後ろのバンの両窓から人が顔と手を出して、それぞれ発砲準備をしていた。

敵が構えるより、カートネットが早かった。

いつの間にか窓から顔を出して、彼女のダブルリボルヴァーが火を吹く。

頭をつつかれた亀のように、オケアノスの刺客は顔を引っ込めた。

その間にもカートネットの牽制が続く。

左の銃で相手の前輪を狙いつつ、右の銃を素早くリロードする。

左の銃のリロード時に刺客が顔を出したところへ、右の銃が牙を剥く。

追っ手はカートネットが両手で同じだけ撃っていたものと勘違いして、

弾の込められた銃撃に苦戦する。

意表を突く動きが彼女の基本戦術なのだと分かった。

俺はというと、Ｆａｓｔｅｒから貰い受けた３５口径のオートマチックを構えて、

刺客が顔を出すのを待った。

相手のバンは少し後方に下がった。

直感で分かった。
ランチャーが発射される。

亡霊

激しい怒鳴り声が無線を通して聞こえてきた。
怜治だった。運転席側の無線をぶんどっているみたいだ。

「庵仁、カートネット、聞こえるか？『タイヤは狙うな』。分かったか！」

俺たちより先に運転手が反応した。
運転手が取った行動は減速だった。
速度が落ちて、後ろのバンのフロントバンパーに付くくらいに近づいた。

「なにやってんだ、近くで狙われたらマズいだろ」
そう言って運転手を止めようとした俺をカートネットが止めた。

「これでいいの。ランチャーはもう発射されるけど、角度を見て」

俺は言われるままにバンのてっぺんに取り付けられているロケットランチャーの角度を確認した。
そうこうしている内にミサイルが発射された。
だが、カートネットの慧眼通り弾道は放物線を描いて、
弾丸は俺たちの遥か前方に着弾した。
至近距離まで近づけば当たらない。
とっさにそのことを見抜いた怜治、運転手、そしてカートネット。
俺は皆の足を引っ張っていないか心配になるくらい無能感に苛まれた。

それもそのはずだ。俺の能力はＳｅｅｋｅｒ。もともと戦闘向け

ではない。
そんな俺がこの任務に就いたのは単純に終わりを確認するだけかと思っていた。
まさか、前線で戦うとは……。

先ほどの怜治の指示は的確だった。
もし仮にタイヤを狙っていたら車間距離は開いて被弾していただろう。
再びアクセルを踏み、運転手が車間距離を広げた。
ランチャーにはもう弾が装填されていなかった。

再び俺とカートネットはバンを狙い撃ちした。
刺客たちも窓から顔を出して応戦する。

少しだけ縮まった距離で銃弾が行き交う。
運転手はハンドルを左右に切り、器用に避ける。

しばらく応酬が続いたが、相手側は弾薬が尽きたようにで、反対車線に車を強引に動かして、退散していった。

「珍しい……、引き上げておった」
ボソリと運転手が呟く。
その口調からどうやら、敵は弾薬切れではない理由での撤退のようだ。

「幸いもうすぐでターミナルだ。お前ら、怪我はないか？」
すっかり無線を怜治が占拠して通信してきた。
運転手は気を利かせ、マイクを後ろ座席に近づけてくれた。

「俺もカートネットも無事だ。また追ってくる前に急ごう」

怜治が答える。
「良かった。今は敵がいない。急ぐのもいいが、準備は怠るなよ」
まるで上司のように俺たちを気遣うとともに戒めるように言った。
車は荒野の幹線道路からまるでオアシスの村のようにいきなり栄えた場所に入った。
市街地は背の高い建物や市場でにぎわっていて、道路は迷宮のように入り組んでいた。
ターミナルはひときわ背の高いドーム状の建物だったので、すぐ分かった。
ロータリーは半月を描いており、さまざまな人々が車から降りて中に入っていく。
俺たちは運転手に別れを告げ、車から降りて、地下へと続くエスカレーターに乗る。
進む中で、俺は見覚えのあるような顔とエスカレーター上ですれ違ったような気がする。
振り向いてみたが、顔に覚えのあるものの名前が出てこない。
「框……？」
ふと口から出た自分の言葉にゾッとした。
框も先の戦役で、永久に帰らぬ存在と化してしまったからだ。
輪廻の終焉、俺たちは『希望体』か『絶望体』に大きく分かれると言われている。
希望体は光に、絶望体は闇に吸収されていく。
そこで輪廻が終了されると言われている。

框たちは人為的に絶望体と化してしまった。
思いだしたくもない過去だ。
しかし、時々こうして亡霊のように俺の記憶から消えていないことを確かめているのかもしれない。

俺は目を伏せてエスカレーターに乗る。

ターミナル

俺たちは最下層の発着場に着いた。
扇状に並んだトンネルから列車が行き交う。
あらかじめ手渡されていたチケットを出して、
俺たちは駅員に見せた。

駅員にチケット見せていた俺たち4人に5人組の男たちが近寄る。
先頭の男以外はガスマスクを被っていて不審なことこの上なかった。
先頭の男はオールバックにした髪をライオンのように広げて厚みを出していた。
瞳に線状の大きな傷があるのが特徴だった。

「君たち、ここから先に行かせはしないよ」
悠然とした口調で俺たちを呼び止めた。
怜治、カートネットは既に相手の正体を見破っていた。

銃声。
男の横にいた見知らぬ通行人が脇腹を抑えて倒れた。

駅構内では混乱を呈した。
オケアノスの黒コートたちが、待ち伏せしていたのだった。

奴らは混乱に乗じて列車を発車させないのが目的だった。

「我が名はギドー。世界の終わりを止める救世主だ」

そう言って先端に弾丸が発射される機構を備えた刀剣を構えた。

ギドーの得物、それは単発式の銃剣だった。やっかいな武器だ。
「みんな、相手にするな！列車に乗れ」
怜治が叫んだ。思わず自動拳銃に手をかけた俺は我に返った。
ユニオンの面々がプラットフォームに向かおうとすると、駅係員が止めに入る。
「お客様、大変危険です。構内の安全を確保してから??」
「うるせぇ、とっとと列車を出せ！コード２３５の発令だ！」
怜治がものすごい剣幕を張り上げ係員に怒鳴った。
コード２３５、それは暗号のようで魔法のようなものだった。
そのコードを唱えられた者はユニオン側の世界の自分の分身と入れ替わる。
世界は平行していて、どちらの世界にも同じ数だけ人間が存在する。
「いってらっしゃいませ」
人が変わったようにユニオン側の駅係員は４人を通した。
ギドーたちが追うが、駅係員が再び阻む。
「どうしてもというなら、私を倒しなさい」
ギドーは自信たっぷりに馬鹿笑いした。
「笑わせるな！お前なんてひとひねりだ」
そう言って銃剣を構えて駅係員に振りかざした。
駅係員はそれを白い手袋で受け止めて、銃剣を灰に変えた。

灰と化したギドーの得物は粉になって崩れ落ちた。

「何！？」

ユニオン側の世界は基本特異能力がそのまま生存能力に繋がる世界だ。

文明が抱える食料問題、少子高齢化問題、

全てをクリアした完成された世界が挑む、次なる問題は争いだった。

一人一人が自分の特殊能力を開発して、生き延びる。

それがユニオンの世界の特色だった。

「私は駅での暴挙は一切許さない」

そう言って駅係員がギドーたちを圧倒している間に、俺たちは列車に乗り込んだ。

怜治が全速力で運転席まで行って、コード２３５を発令したのは、言うまでもない。

追憶

無事列車に乗り込んだ俺たちをまず乗客の奇異な瞳で出迎えられた。
俺たちは気にも留めずに指示通りの車両に移動した。
席が向かいあっている車両で荷物を降ろして、４人はそれぞれ思い思いの表情で席についた。
「まったく、先が思いやられるぜ」
怜治が不満を漏らす。それはこのメンバーに対するものではないことは全員分かっていた。
オケアノス、彼らの目的は俺たちと相反する。
衝突は免れない。厄介な奴らだ。
「やけに先回りしていたけど、情報漏洩してないわよね？」
イヴが訝しげにみんなに問いかけた。
そう言えば確かに奴らは俺たちの行く先々に現れる。
なぜこちらの居場所や通過点がわかるのだろうか。
「考えても仕方ないよ、休も休も！」
カートネットの一言で会話が切れた。
怜治は窓の景色を見て、カートネットとイヴは談笑し始めた。
俺は少し座席にもたれて、体を休めるとする。

――――――――――――――――――――

「お前はなにも知らなかったのか」

目の前に顔の無い男が俺に問いかける。

こいつは確か、いや……、だめだ思いだせない。

「こうなることを知っていたんじゃないか」

黒々とした闇の中に俺は顔のない男と立っている。

足元は沼のように足先まで黒い何かに浸かっていた。

「生命の躍動はお前が奪ったんだ」

その声色からだんだん記憶が繋がってきた。

顔がないのは、存在しないのか、それとも俺に見えてないかのどちらかだ。

「俺たちを忘れたとは言わせんぞ」

そうだ。

俺の心に巣食う、悪性の腫瘍でもあり、俺をつなぎとめている大事な記憶でもあった。

框、済まない。

「今さら謝って済むものか」

そう言って顔を失った框は俺をいつまでも執拗に呼び続ける。

庵仁、庵仁、忘れるな。庵仁。お前のせいだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

俺は闇の中で叫び声を上げて我に返った。

日は再び落ちて、怜治もイヴもカートネットも眠り落ちていた。

今のが、夢なのか、俺の想像上の意識下での出来事なのか、歪んだ追憶なのかはわからない。

框がいつでも俺の足を掴み、こちら側に引っ張ろうとしているように思える。

生命の躍動、通常人間は原始的な運動??すなわち脈動によって生きている。

俺たちは違う。世界の異なる人間が生きていくには脈動ではない、同じだけのエネルギーが必要だ。

それが生命の躍動と言う。

俺たちは魂が呼吸していて、人間のもう一段階上の肉体が躍動している。

わかりづらいと思うが、ようは俺たちは人間のようであり、人間ではないということだ。

そしてかけがえのない戦友の躍動を奪ったのは、他でもないこの

俺だ。

俺は両手を顔に埋めて静かに黙祷した。

闇夜を突き進む列車の振動が、俺の孤独な魂と共鳴した。

シートン研究ラボ

「着いたわよ」
イヴに起こされるまで自分が眠っていることに気付かなかった。
列車のカーテンを開けると、暁のまぶしい朝焼けが窓一面に広がる。
辺り一面銀世界が眼下に映る。
幸い外は吹雪いておらず、晴れた日光に雪が反射してきらめきがきれいだった。
俺たち一行は列車から場末の駅に降りて、待機していた名もなき駅係員に案内された。

「こんな装備でも寒いな、おい」
怜治が軽口を叩く。それに対して女性陣二人が微笑する。
駅係員はコード２３５発動するまでもなく、はじめからこちらの世界にいたユニオンの構成員だ。

「こちらを」
そういって全員に手渡されたのは社員証だった。

「こちらはこれからあなた方が行かれる、シートン研究ラボに入るために必要な社員証です」
駅係員の言葉は流暢ではきはきとしていた。
彼の説明によると、これから俺たちは研究施設で開発されている細菌兵器を、極秘に視察する企業に成り済ましてことの動向を見極めるそうだ。
この細菌兵器で世界が終わるなら、その『終わり』にふさわしい

ほどのものか、俺たちが見極めるということだ。
はじめから俺は思っていたが、こんなつまらないもので終わらせられるほど世界は陳腐ではないということだ。
自分だったら細菌兵器での終わり方は美学に反する。
他の奴らはどう思うかだが。

駅と研究施設は直結していた。地下の空洞状のトンネルからラボの下に繋がっている。
事実、人の出入りは地下からが主になっていると、係員は言う。

その入り口は不気味だった。
大きな緑色の液体が入ったビーカーというか、巨大な筒がまず出迎えてくれた。
中には得体の知れない肉片のようなものが胎動しながら培養されていた。
機械類のコードが生き物のようにそこら中に張り巡らされていた。

控えめに見ても合法的な巣窟ではない。

「これは科学というものを冒涜しているとしか、思えないな」
珍しく怜治が感情的になっていった。
そして珍しく俺も怜治に同意した。

「まったくだ。奴らは何かをはき違えている」

一瞬意外そうにこちらを一瞥したあと、怜治は足を進めた。

この時点で俺の決意は固まっていた。

問題はどうやってそれをメンバーに伝えるかだ。

ヴァイルス29

俺たち一行がラボに足を踏み入れると、恭しく背中を丸めた白衣の研究員が現れた。
白髪混じりの壮年の男性で、面白いくらいにひん曲がった口元が特徴的だった。
名をシートンと言い、ここのラボトリーの最高責任者だと告げた。
「話は伺っております。ささ、どうぞこちらへ」
俺はなんの話をどう聞いたのか訊いてやりたくなったが、そんな意地悪な感情をグッと堪えた。
シートンを先頭に俺と怜治が続き、その後ろをイヴとカートネットが物珍しそうに眺めながら歩く。
金属性の配線が道を作っているほど張り巡らされていた。
訳の分からない計器や機械が混雑して乱立しており、
そこにあるというよりは、スペースの限り配置したという印象を受けた。
「こちらです」
小走りに走るその様はまるでネズミだなと、思った。
説明するのが嬉しそうにシートンが言った。
「こちらが人類最終兵器、『ヴァイルス29』です」
そう言って見せたのは巨大なビーカーに浮かぶ細かくうねうねと動く粒子だった。
赤黒い液体に白い何かがうごめいており、不気味であることは間違いなかった。

「このウイルスは繁殖性がとても高く、それでいて致死性も強大です。これを国土にばらまけば、
人類はあっという間に滅亡するでしょう」

怜治はその説明を半分上の空で聞いていた。
「29の意味は？」
一言だけ、そう怜治が呟いた。

するとシートンが目を輝かせて早口で唾を飛ばしながら答えた。
「29回目にしてやっと成功したウイルスだからです！
それはもう、血も滲むような努力の元に開発された代物、とても成功して感動しております」

「お前の感動はどうでもいい」
怜治が冷たく吐き捨てた。

呆気に取られたシートンをよそ目に言葉を続ける。

「お前は一体、なぜ人類を終わりに導きたい？」

シートンは怜治の覇気にやられてか、途端におどおどして答えだした。

「え、あ、その。こんな世界終わってしまえばいいと思ったからです。
私にはとても楽しいことなんて何もないこの世界を」

「庵仁、どう思う？」
そう言って俺に振ってきた。これは俺の意見を自由に言ってもい

い承認だろう。
俺はためらわずに答えた。
「だめだな。そんな理由では世界はおろか、コイツの命さえ終わらせるに至らない。
本質的に人生を楽しむ努力が欠如して方向性を完全にはき違えているだけだ。
こんなボンクラに世界破滅のスイッチは押させない」
怜治が初めて俺に笑いかけた、安心しきった信頼の笑みを。
「当然だ。わかっているじゃねぇか」
シートンは今度はカッカと頭に血が昇ったように早口でまくしたてた。
「あああなたたちは、一体？このウイルスを媒介してくれるブロンゾート社の者では……？」
「コード２３５、発令」
一言だけ怜治が力強く言った。

採光

俺たちはウイルスの最大の弱点、日光をシートンに採光させてヴァイルス２９を全て死滅させた。
シートンは思いのままに動き、自分の行動を全く疑わずに、自分の研究の成果を水泡に帰した。

研究所を後にした俺たちは帰りの列車の中、無口で移りゆく景色を眺めていた。

「くだらねぇな。ウイルスって言っても、ただのおもちゃだ。
こう、本質的なクライマックスは感じられねぇな」

怜治の呟きに同意した。
「まったくだ。人間たちの歴史の重みを全く感じさせられない。
とんだ期待はずれだったな」

「気持ち悪かったしね、あのおっさん」
のんきにドリンクを飲みながらカートネットが言った。
多少的外れな意見も彼女なら歓迎される。

「次は確か、核兵器ね」
イヴが確認するように呟いた。怜治が面倒くさそうに頭を掻く。

「一番やっかいそうだよな、軍が介入しているんだぜ？」

横で氷をおもちゃにしているカートネットが言う。
「コード２３５は使えないの？」

おいおい勘弁してくれよと、前置きをおいて怜治が言った。
「俺たちの世界、ユニオンこそが統率調和機関だぜ？
軍はこっちにはあっても、俺たちの世界にはない。
よってコードが使えないんだ」

イヴが溜め息を付いた。
しかし、それが怜治の言葉に対応しているものではないことにワンテンポ置いて気付いた。
刺客。

俺たちの客室の扉に黒い影が立っていた。
オケアノスか。

「待ってねぇでお出ましろよ」
怜治が挑発した。

黒い男がその瞬間扉を破って、銃器で弾丸を数発撃ち込んできた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1284w/

終わりの探究士-seeker of the end-

2011年10月9日15時01分発行